

スの一群である。耿氏に依れば北米産の *Triplasis* に似て居るが護穎は微細な二齒を有するか又は全縁で内護穎の龍骨部は ciliolate-scaberulous な點が相違するし、又從來あてられて居た *Diplachne* はヒナガヤ (*Diplachne fascicularis* BEAUV.) が基準種であつて此れは *Leptochloa* と同じものである。 *Leptochloa* はテウセンガリヤス屬に比して稈の節が少なく、花序は澤山の 一側に配列する穗狀の總狀花序から成り、葯は短かく、又閉花を生じない點で區別される。

耿氏に従へば *Cleistogenes* 屬は五種を含み歐亞大陸の特産で各種の檢索表は次に譯出する通りである。

A. 稈は高さ 30セ.メ.乃至一米、疎生又は屢草生。

B. 小穗は 3-7-花(時に2花),長さ 7-12ミ.メ.

C. 花序は長さ 4-8セ.メ.下部の枝は單一、その長さ 2-4セ.メ.——1. *C. serotina* KENG.

D. 第二苞穎は長さ 4-6ミ.メ. 鋭尖頭、その下部には往々 3-5-脈、第一護穎の芒の長さは 1-3ミ.メ.——1a. var. *sinensis* KENG.

DD. 第二苞穎は長さ 2-4ミ.メ. 鋭頭又は稍鈍頭 一脈 第一護穎の芒は長さ 3-5ミ.メ.——1b. var. *Nakaii* KENG.

BB. 小穗は 1-3-花,長さ 5-7ミ.メ.——1c. var. *aristata* KENG.

AA. 稈は高さ 15-50セ.メ. 通常密に叢生.

B. 護穎は全縁.無芒(又は長さ 0.3ミ.メ.程の小突起あり)最下の護穎は長さ 3-4ミ.メ.——2 *C. chinensis* KENG.

BB. 護穎は微小なる二齒あり.有芒 最下の護穎は長さ 4-6ミ.メ.

C. 第一護穎の芒は 0.5-2ミ.メ.

D. 苞穎は通常鋭尖頭、龍骨上は稍粗澁、第一苞穎は長さ 1.5-3ミ.メ. 一脈——3. *C. bulgarica* KENG.

DD. 苞穎は鋭頭又は稍鈍頭平滑、第一苞穎は長さ 0.8-2ミ.メ. 屢無脈——4. *C. caespitosa* KENG.

CC. 第一護穎の芒は 3-7ミ.メ.

D. 第一護穎は長さ 5ミ.メ. 芒は長さ 3-5ミ.メ.——5. *C. squarrosa* KENG.

DD. 第一護穎は長さ 6ミ.メ. 芒は長さ 7ミ.メ.——5a. var. *longe-aristata*. KENG.

本邦産としては *C. serotina* var. *Nakaii* Keng 及び var. *aristata* Keng の二變種が記されて居る。 (J. O.)

クリステンセン氏：——羊齒類名彙第三増補 C. CHRISTENSEN: Index Fi-

May, 1935.

115

licum. Supplementum Tertium 1917—1933 (Oct. 1934).

羊齒類分類學の權威者である デンマークの Copenhagen の CARL CHRISTENSEN 氏が不朽の名著 *Index Filicum* の第三増補。今回の増補は 1917年より 1933年に至る 17年間に亙る全世界の業績に對するもので全卷 219頁序文に次で分類表があり、次はアルファベット順に屬名種名を並べた本文でこれに 185頁を費し、最後の 19頁は文献集にあてられてゐる。分類表は 既刊二冊の増補には見なかつたもので 大變便利である。又今日では幾多の屬に細分しなくてはならぬと一般に考へられてゐる *Dryopteris* フシダ屬や *Polypodium* ウラボシ屬を今までの 廣義のまゝに残してあるのも時宜に的した處置である。かゝる性質の書でこれらの屬を細分すれば 學名を機械的に變更しなければならぬ 種類が澤山にできて 不用の異名が増さざるを得ないからである。分類表の最後にある屬及び種の總計を見ると著者は 1934 年 1月に於て 12科 213屬 9387種(このうち 3屬 6種は分類上の位置不明)を認めてゐる、澤山の學名變更があり、又今日まで日本特産と考へられてゐた種類で(例ば *クロガネシダ*、*オホヒメワラビモドキ*、*ウラボシノコギリシダ*等)すでに古く 支那で 發見記載せられた種と同種にせられたものもあるが、繁雜をさけてこゝには これらを列挙しない。羊齒類の分類を研究するものには 1933年までの全世界の業績を知ることができて著者から受ける恩恵はたいしたものである。なほ *Lycopodium*, *Selaginella*, *Equisetum* 等の所謂 *Fern allies* の *Index* をも完成せられんことを切望する次第である。

(田川基二)

牧野富太郎、清水藤太郎両氏：—— 植物學名辭典

本書はその書名の示す如く 植物の學名つまり屬名と種名との解説を目的とする 辭典であるが 他面植物記載用語の羅和對譯の辭典としても 役立つものでむしろこの目的に最も活用せられるかもしれぬ。四六判三百餘頁、全編を八項に分ち、第一の凡例に於ては 屬名及び種名に必要な ラテン文法の一斑を示し、第二のラテン語の發音に於ては ローマ法、英語式、獨語式の三發音法に分ちその差を表で示してある。第三の野生植物分類表には 分類學上使用せられる 階級即ち界より 個品に至る 二十一階級を示し 第四の植物自然分類一覽は エングラー式による 管束植物の科までの分類表である 次の 第五は 屬名表で 日本植物を主とした 屬名を一々分解し 語原を示し 意味を明にしてある。第六は 難解地名表で 古書に出てくる地名で 今日何處のことかわからぬやうなものは この頃を見れば 解決するわけである。第七は 種名表で 本書の大半を占め、かなり多數の圖も 挿入されてゐる、解説は 要領を得て居るが 簡單である、この頃は又